■２００３年カンボジア総選挙監視活動

カンボジア総選挙監視活動に参加して

西山隆（大分県佐伯市市議会議員）

今回の選挙監視活動に参加することには、若干の迷いがあった。それは、私自身の環境の変化と、それにより自発的行動が取りづらくなったことに原因がある。それでも自らが体験した日本の地方選挙とカンボジアの選挙を、単純に比較検討することも面白いかと思い参加することを決めた。しかしながら、以前に比べて忙しくなった身ではなかなか思うように時間も取れず、結局事前の研修会には参加できず･･･。２０日プノンペン集合のスケジュールだが、２３日夜しかプノンペン入り出来そうもない。IB(インターバンド)事務局長阪口さんからそれでもいいですよと連絡があり、またパキスタン選挙監視ミッション参加組の皆さんたちと一緒に活動が出来ることで、いつもの調子で呑気に参加することにした。事前に ANFREL（Asian Network for Free Elections）のコーディネーターとして参加していた安藤さん、同じくANFRELのLTO(Long-term Observer)としてバッタンバンに展開していた岡田君や IB ミッションコーディネーターの清水さんたちの情

報もあり、心配せずに済んだことも参加する気持を盛り立ててくれた。

７月２３日、バンコクでウイーンからやってきた伊藤さんと出会い、夕刻２人でプノンペンへ入る。空港へは安藤さんと橋戸さんが出迎えてくれて、久しぶりの再会を喜び合った。宿舎のゴルディアナホテルに着き、阪口さんら他の IB メンバーと自己紹介を行った。

夕食は、パキスタンミッション参加組中心に１０人くらいのメンバーと一緒に「オリガミ」という日本食の店に出かけ、食事をしながら若干の情報交換をした。

７月２４日朝、小雨の振る中いよいよ今回の監視地域コンポンチュナンに向けて出発した。メンバーは安藤隊長、伊藤、橋戸、小川、西山の５名、途中市内のスーパーで買い物を済ませてから向かったが、主に外国人向けのこのスーパーで、豊富に品物が溢れていたことに驚かされた。２時間ほどの行程でコンポンチュナンの町に着く。中心部に近い位置にあるゲストハウスがここでの拠点となる。荷物を運び込んでから、通訳のセーハらと会い、市内のレストランで昼食をしていると、NCPKP（チャックラポン党）の選挙キャンペーンに遭遇し

た。このキャンペーン隊は約３０台前後のトラックなどを使い、各車両には統一されたＴシャツを着た２０人前後の支持者が乗り込んで、レストラン前の広場の周りを大音量のスピーカーで気勢を上げながら行進していく。日本で描いていた印象とは違い、思った以上に整然と行進していること、周囲に武装した警官等の姿が見えないことに少し拍子抜けした。

７月２４日、２５日の２日間をかけて、COMFREL 事務所などの訪問を行い、事前のリサーチと選挙キャンペーン活動の監視活動を行う。その過程で、近くにある刑務所で、NEC（国家選挙管理委員会）が決定した未決囚に対する投票の行い方などを刑務所の担当者にインタビューして、投票行動が確実に行われるかどうかのチェックも行った。ここでは不在者投票のような措置は取られず、各未決囚を選挙人名簿のある出身地まで移送して選挙を行わせるとの説明だったが、少し非現実的に思えた。しかしながら、これらのインタビューからは通常の選挙活動の実態が垣間見えた。このことから、この国でこれまで行われてきた選挙に対して、民主化が後退していることなのかこれから比較する必要がある。その他に１件、選挙がらみに思える殺人事件がありその実態を把握しようとした。我々の調査では十

分に噂の域を出ていたが、この事件が選挙にどのような影響を及ぼすかは不明だった。２５日の主な活動でPEC（投票所選挙管理委員会）を訪問していたとき、前の広場ではCPP（カンボジア人民党）が大音量のスピーカーからキャンペーンソングを鳴らしながら５０台以上の車両に分乗してキャンペーン活動を展開していた。お揃いのTシャツと帽子で気勢を上げながら行進する様は、NCPKPのキャンペーンを大規模にした派手なものだった。ただ比例代表制の選挙活動は候補者自身の姿が見えないので、人々が選挙を身近に感じているかどうかは、わからなかった。モニュメントの付近には武装した警官が数人監視していたが、私が自動小銃を持った警官を見たのはこれが初めてで、また、後にも先にもこの時だけだった。午後から川の近くでSRP（サムランシー党）のキャンペーンがあるとのことだったが、あいにく雨がひどくなり行われる気配がない。川から船を使って監視活動を行うというオプションも考えていたので、船を出してもらって可能かどうか確かめた。天候が悪く、川では危険が伴いそうだったので、結局この企画は断念した。

この日すべての選挙キャンペーン活動は無事終了した。

７月２６日朝、コンポンチュナンチームは２チームに分かれてリサーチを開始した。２５日に他の監視団と調整した監視予定地域の投票所をカバーするためだ。早速車で１時間ほどの距離にある Banteay Preal（バントレイプリエール）の投票所になる学校やお寺を訪問した。最初に訪れた投票所では、すでに投票箱などが設置されていた。周囲の環境は問題ないように思えた。この日１１箇所の投票予定場所を訪問したが、すでに投票箱などが設置されたところや、まだ準備の済んでいない投票所などその準備状況はまちまちだった。これらの場所はすべて持参した GPS（衛星航法装置）に入力して、投票日に必要になるであろう各場所までの距離及び時間を正確に把握した。

７月２７日、選挙当日、午前６時過ぎに宿舎のゲストハウスを出発した。投票の始まる午前７時前に最初の投票所に着く。外に張り出している選挙人名簿に自分の名前があるか確認している人など、すでに表には投票を待つ村人が多く集まっている。投票所内部は準備が整っていたが、投票用紙のパンチングした箇所できちんと用紙が外れずに手間取った。それでも時間通り午前７時投票が始まっ

た。監視活動を続けていくと、数箇所の投票所で問題が発生した。

それらは、

１．投票所のチーフが投票行為に必要以上に関与していたこと。

２．周囲で買収が行われていた可能性があったこと。

３．SRP のエージェントが村のチーフが投票をコントロールしていると CEC に不平を申し立てていたこと。

４．ID カードの証明写真が顔の半分が切れた本人と判別つかないものであったが、投票できたこと。

５．村のチーフが投票所の周りで投票を誘導していた可能性があった。

などであったが、これは組織的な選挙妨害や致命的な選挙方法の欠陥として取り上げるべきなのだろうか。

７月２８日、開票日。一箇所に２つの開票所となった学校で開票開始から監視する。開票作業手順についてはマニュアル通り推移しており、問題点は感じられなかった。開票作業は手作業で行われ、各政党のエージェント、COMFREL のオブザーバーらが監視する中で順調に進んでいった。正午過ぎにすべての開票作業が終了し、この地域では CPP（カンボジア人民党）が圧倒的な強さで票を獲得した。

１０年前の混乱した選挙に比較すれば、今回の選挙は民主的であったと思われる。投票率は私の監視した開票所では高かった（私の計算で９１～９２％）が、国全体では総じて低くなっていたようだ。民主選挙が浸透すれば、逆に投票率の低下を招くことが考えられるので、その意味においても逆説的にこの国の民主化が進んでいると考えてもいいのではないだろうか。しかしながら、事前に一番興味があり把握したいと思っていた、ポルポト時代の負の痕跡は、ついに現在のカンボジアの人々の心には見ることがなかった。帰国する最後の日にプノンペンのツールスレイン収容所を見学する機会があったが、今のカンボジアの人々とのギャップが大きすぎて、理解不能に陥ってい

る。この国の人懐っこい笑顔の人々と接した時、どうしてこのような理不尽が起こったかは、私の中で今も依然謎のままになっている。

今回のミッションで常に感じていたことは、市井で行われていることは大してどの地域（国）においても変わらないということだった。普通の人がその地域において一生を全うする時に必要な安定をもたらすものである政治が、きちんと行われていく過程を見守ることによってその手伝いをしていくという気持で活動したが、入る前のカンボジアの印象とは違い、非常に民主的な経緯を辿ったと感じている。パキスタンの時のそれと比較しても、安定していた。そう感じた背景には、選挙期間中を含めて回りに武器を携帯している警官などがほとんど居なかったことが挙げられよう。プノンペンの国際空港においてもその姿は見かけなかった。また選挙期間中に暴動や殺人などがほとんど発生しなかったことも、その意を強くした。それだけカンボジアは政情が安定してきていると考えてもいいのではないだろうか。もちろん、これからも状況を見守っていく必要があることは言うまでもない。

今回のミッションに参加して、ボランティアによる国際的な監視活動などを含む途上国への援助は、国が武器を携帯して行う大規模な援助活動よりも、はるかに平和に貢献できるとの確信が持てた。

パキスタンの時と同様、監視地域で出会った子どもたちの人懐っこい笑顔は素晴らしく、この国の明るい未来を予見させるのに十分だった。ただ都市部のプノンペンでは物乞いをする子どもたちや戦争で身体障害者になって物乞いする人たちも居て、地方の子どもたちとの差が感じられたのは残念だった。 今回、誘っていただいた阪口事務局長、プノンペンでお世話していただいた清水さん、コンポンチュナンチームの要、安藤隊長、私の健康管理まで気を使わせてしまった橋戸さん、頑張った小川さん、そうして、細部まで心遣いをしていただいた伊藤さんらに感謝します。ありがとうございました。

▲ Page Top

Copyright ©2002-2003 InterBand All rights reserved.